

2008 年度プロジェクト発表会実行委員会活動報告

Report on the Activity of Project Committee in 2008

ネットワーク情報学部 岡和田 拓也¹、高野 葉子²、齋藤 雄志³

School of Network and Information Takuya OKAWADA, Yoko TAKANO, Takashi SAITO

Keywords: Project, Presentation, committee

1. はじめに

今回こうした資料を掲載する目的は、来年度以降の実行委員会の活動の際における参考資料とすることと、また実行委員会の活動を、発表を行う学生や今後プロジェクトを履修する学生に知ってもらうことにある。

2007 年度の実行委員会も同様の資料を残しており、2008 年度の実行委員会が活動するに当たって、とても参考になった。また、文中にも記述があるが、発表会には実行委員会だけではなく教務課、先生方といったさまざまな方々が関わっていることを発表を行う学生に意識してもらうことで、よりよい発表会になるのではないかと思います掲載することにした。

2. プロジェクト発表会とは

専修大学のネットワーク情報学部では、3 年次に学生が 4 年間の学生生活の中で内容の濃い時間を過ごすこととなる演習授業「プロジェクト」がある。

本学では 2 年次より「情報戦略」「ネットワークシステム」「コンテンツデザイン」「情報技術創造」の 4 コースに分かれ、それぞれのコースで専門となる知識や技術を学び、3 年次にプロジェクトを履修する。

先生もしくは学生によって立ち上げられたテーマごとに 10 ～ 20 人程度のグループを作成し、先生や学生同士議論を重ねることで、研究を進め、問題解決や成果物制作に取り組む。そうして、進めてきた 1 年間の活動や成果を発表する場、それが「プロジェクト発表会」である。プロジェクト発表会では、学内の先生、学生だけでなく、学外の企業の方や卒業生、さらにはネットワーク情報学部に入学生予定の高校生などが来場し、発表を見ていく。そのため発表する 3 年次の学生は、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を磨き、さらには発表会を自分たちの成果物を見直すきっかけとし、自分たちの成長の手助けにする。

3. プロジェクト発表会実行委員会

3. 1. プロジェクト発表会実行委員会とは

プロジェクト発表会実行委員会とは 4 年次、2 年次の学生数名で構成されるプロジェクト発表会を運営していく組織である。その立場は教務課と各プロジェクトとの中間に位置し、各プロジェクトからの発表会に関する質問、意見などをまとめ教務課と話し合うことで、プロジェクト発表会を管理、運営していく責任がある。さらにはプロジェクト発表会を盛り上げるという役目を担っており、告知用のポスター、Web サイト、会場装飾などの制作もプロジェクト発表会実行委員会の仕事である。

なお、2008 年度プロジェクト発表会のメンバーは以下に示す通りである。

4 年生	NE17-0244	岡和田 拓也 (代表)
	NE17-0059	柳澤 理美
	NE17-0074	細木 美帆
	NE17-0240	中島 慶子
2 年生	NE19-0064	高橋 香菜衣
	NE19-0089	高野 葉子
	NE19-0170	朝比奈 夏海

3. 2. プロジェクト発表会実行委員会の編成方法

委員会代表者のみ、教務課からの依頼によって選出され、他の 4 年生のメンバーについては代表者自らが編成していく。2 年生に関してはコンテンツデザインコースの学生を担当されている先生方に紹介していただく。2008 年度は 2 年生の代表となる学生を 1 名選出していただき、他の 2 年生メンバーはその 2 年生が編成した。さらに 2008 年度の委員会は新しい試みとして情報戦略コースの学生も実行委員会メンバーとして迎えた。その結果としては 2 年生に任せられる仕事の幅が増え、実行委員会の活動により深く関わることができた。

¹ 平成 20 年度プロジェクト発表会実行委員会代表 (学生側組織)

² 同委員会委員

³ 平成 20 年度プロジェクト実行委員会委員長 (教員側組織)

4. 実行委員会の活動履歴

4.1. 4年生の活動履歴

1 発表会の企画と実施にあたってのルール等の検討

実行委員会の最初仕事は、プロジェクト発表会における方針を決めていくことであった。具体的には発表場所に求める条件の洗い出しや発表会での投票の有無、各プロジェクトへの申請書のスケジュール決めなどが挙げられる。

2007年度、発表者としてプロジェクト発表会に参加した実行委員会の4年生メンバーは去年の経験からスケジュールを前倒しで行うことを決定したため、夏休みに定期的に集まり、話し合いを進め、2008年度のプロジェクト発表会実行委員会の活動が本格的にスタートした。

結果としては、発表場所の決定が比較的早く行われたことにより、その後の調整や別の仕事に時間を割り当てることができた。

2 発表会場及び各プロジェクト発表場所の決定

プロジェクト発表会を行うに当たって大学内のどこで行うかがとても重要な要素である。2006年度までは9号館5階にあるアトリウムとゼミ室で発表会を行っており、2007年度は10号館1階のアカデミー・モールとゼミ室で発表を行った。本年度については10号館が新しい施設であると共に、9号館と比較してとても開放的な印象であることなどを考慮し10号館で行うことに決定した。

発表会場の決定後、各プロジェクトの発表場所を決定していくことになる。ここでの実行委員会の仕事としては発表場所の確保と各プロジェクトの要望調査、発表場所の調整（具体的にどのプロジェクトにどこブースを割り当てるかなど）が挙げられる。

発表場所の確保として、10号館1階のアカデミー・モールとゼミ室を教務課に発表会当日借りられるよう依頼した。ゼミ室では1プロジェクト1部屋使用した発表を行うのに対し、アカデミー・モールでの発表ではブースごとの発表となるため、全プロジェクトが発表できるだけのブースの大きさや場所を考え、会場レイアウトを決定した。

次に各プロジェクトの要望調査は、10月中旬に各プロジェクトに発表場所に関する申請書を送付し、記入したものを返信させる形で行った。その結果、多くのプロジェクトがゼミ室を希望し、話し合いによりゼミ室を使用するプロジェクトを決定する必要があった。

アカデミー・モールで発表するプロジェクトについては、特別な理由のあるプロジェクトのみ発表場所の要望を受け、できるだけ企画の似たプロジェクトを近くに配置するよう実行委員会が決定した。

3 備品・機器の確認調査および確保

発表会場が決定すると共に、プロジェクト発表会で貸し出すと考えられる大学の備品（イス・机・スクリーンなど）や機器（プロジェクタ・PCなど）の確認を行い、事前にある程度1プロジェクトに貸し出すことのできる備品・機器の数を検討していた。その後、各プロジェクトの発表場所が決定したタイミングで大学の備品・機器の貸し出しに関する申請書を送付し、要望を受けた。

プロジェクト発表会において、ほぼ全プロジェクトが貸し出しを希望すると予想していた、プロジェクタやスクリーンについては数に限りがあり、実際は各プロジェクトに最大で1台ずつしか貸し出すことが出来なかった。そのため、それらの機器を複数台利用したい場合は各プロジェクトで用意してもらうことになってしまった。そのため、実行委員会が確保する機器については教務課に依頼することで基本的には学生が借りることの出来ないところから確保し、先生の責任下で学生が借りられるところからはお借りしなかった。

また各プロジェクトにはプロジェクトPCが1台ずつ貸し出されていることから、PCについては実行委員会では貸し出しを行わなかった。もし複数台の使用を希望する場合は各プロジェクトで用意してもらい、実行委員会はその管理についても関与しなかった。

イスや机などの大学内の備品については、事前に数をすべて確認しておき、発表場所の広さにもよるがプロジェクトが均等に使用できるよう申請できる数に上限を設け、貸し出し希望をさせることにした。上限を超えて使用したいというプロジェクトについては、実行委員会の使用分を貸し出すことにし、実行委員会で使用するものについては別の教室から運搬することで対応、その運搬を手伝うことを条件に許可した。ただし、その際には他学部の授業に支障が出ないように、事前に教務課に相談し、使用していない教室のものを使用する必要がある。

他に貸し出した備品として10号館内のイスや植物などである。これについては特に使用する予定がなかったため、数量が足りていれば貸し出しを許可した。

実行委員会が貸し出す備品・機器はかなりの数になりその上、貸し出すプロジェクトが複数あることから、貸し出しに関わる管理はかなりの時間を使い慎重に行った。また10号館の備品については発表会終了後に同じ状態に戻さなければならず、どこに何が置かれていたかを事前にすべて把握する必要があった。

4 会場設営・撤去

発表会前日には会場の設営が行われ、発表会後には会場の撤去作業が行われる。会場の設営を行う日は5限まで授業があるため、各プロジェクトは18:05以降でなければ設営を始めることができない。実行委員会はそれよりも早い段階で確保しておいた教室内で作業することは可能だった。

が、貸し出す備品の運搬や会場デザインの印刷などかなりの仕事量があった。そのため実行委員会のメンバーを2チームにわけそれぞれのチーム単位で仕事をするようにした。しかし、そもそも実行委員会の人数が少なく、チームに分けるとさらに人数が減ってしまうことから、発表会の設営・撤去時に有志で友人に協力していただいた。

設営日の仕事としては、会場内の使用しないイスや机の移動、備品・機器の貸出し、発表会における注意事項などを記した資料の配布などが行われた。

設営日の反省点としては、実行委員会の当日の仕事が多く、プロジェクトからの質問にすぐに対応できないことがあったことである。

設営に対して撤去作業における仕事としては、貸し出し備品・機器の回収、会場復旧などが挙げられる。

貸し出した備品等の返却については、イスや机の返却時間を守らない学生もいたものの、機器については慎重に管理した甲斐あってか、スムーズに返却は行われた。

また本年度からの仕事として復旧確認を行った。これは発表者である3年生が自分たちで使用した発表場所の復旧が確実に行われているかを実行委員会が確認する作業である。この作業の目的は、会場の復旧が出来ていない等の理由により2008年度以降のプロジェクト発表会に影響が出ないように留意したものである。

5 発表会当日における仕事

発表会当日は前日設営日だけでは準備が終わらなかったプロジェクトが朝早く設営に来る可能性があったので、教務課に依頼し、8:30には鍵を開けていただくようにしてもらったため、8:00過ぎには登校し、簡単な見回りなどを行っていた。発表が始まると、実行委員会の仕事は受付対応と定期的な会場見回りである。受付は負担が大きくなりないうように交代して行い、見回りも会場のデザイン物の剥がれ等に注意して行った。また空いている時間に発表している3年生に来場者の反応などを聞くこともできた。

時間帯によって多少差はあったものの多くの方にお越しいただくことができ、発表会は良いものになったと思う。

6 発表会後の仕事

プロジェクト発表会が終わった後も実行委員会の4年生には仕事はある。まずは、発表会において来場者に良かったと思うプロジェクトの投票（Good Exhibition 賞）の分野別のランキングの集計・公表やコメントの集計である。Good Exhibition 賞の詳細は後述するが、例年、発表会における投票の結果発表は発表会時にのみに行われている。しかし、投票が上位3チームのみではフィードバックとしては不足しているように思われる。また投票データの詳細を見ていくと、受賞できなかった原因などを考えることができることもある。それらのことを考慮し本年度からは一部でも詳細なデータを公表することで発表者である3年生

たちが自分たちの成果に対する評価を分析できるようにした。

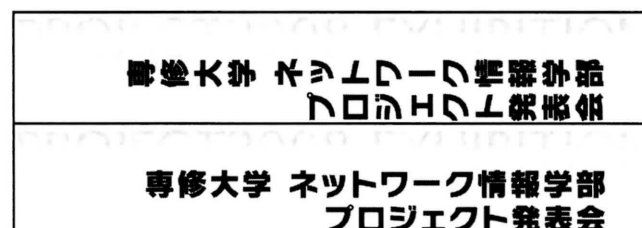
次に「2008年度プロジェクト発表会実行委員会活動報告書」の作成である。この活動報告の作成は実行委員会の判断によるものである。というのも2007年度の実行委員会がその活動内容をドキュメント化し、2008年度実行委員会のために残してくれていた。本年度の実行委員会が活動を進めるに当たり、それら資料がとても参考になった。そのため2008年度も来年度以降のプロジェクト発表会実行委員会の資料として作成することを決めた。

そして最後の仕事として「ネットワーク & インフォメーション」に活動記事を掲載することにした。内容自体は活動報告書の抜粋ではあるが、この「ネットワーク & インフォメーション」に掲載することには別の意味がある。プロジェクト発表会実行委員会の活動や存在は、各プロジェクトの代表者にとっては多少身近ではあるものの、プロジェクトのメンバーや来場者である学部の下級生には馴染みのない委員会であるため、活動において理解が得られない場合がある。そのため、誰でも目にするのできる「ネットワーク & インフォメーション」に実行委員会の活動を記すことで、実行委員会だけではなく教務課、先生方といったさまざまな方々が発表会に関わっていることを意識して行くと一層よい発表会になるのではないかと思い掲載することにした。

7 一部会場デザインの作成

①立て看板

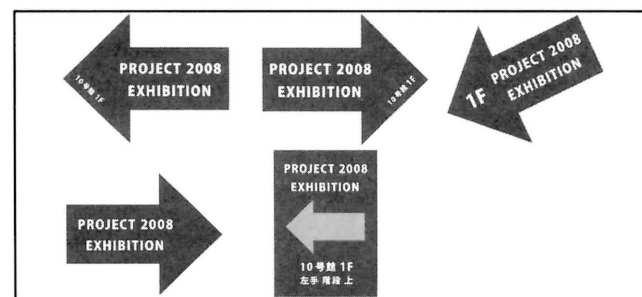
制作：中島 慶子



発表会当日、9号館側エレベータ横（縦向き）と駅側出入口横（横向き）の2箇所に設置した。

②矢印

制作：柳澤 理美



発表会当日に10号館内に貼られたプロジェクト発表会を案内するための矢印。

③ネームカード・その他デザイン

制作：柳澤 理美

制作：細木 美帆



発表会で3年生につけてもらったネームカード（左）と控え室などのドアに貼ったデザインの一部（右）

4.2.2 2年生の活動履歴

1 ポスターの作成



制作：高野 葉子

サイズ：A2・A3・A4

＜掲載場所＞

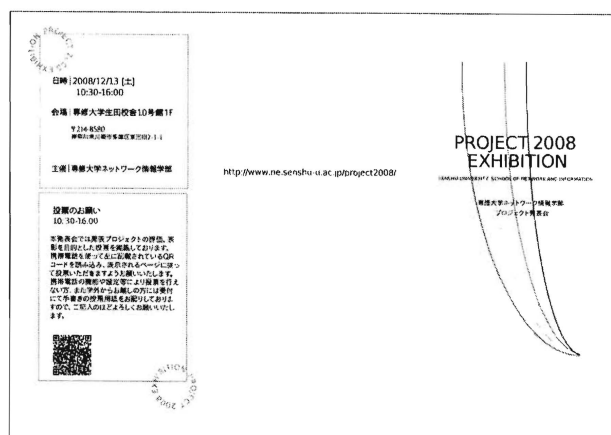
学内掲示板や食堂、教員室
受付図書館入り口などに
貼っていただいた。

発表者の3年生が意欲的に活動しているところからテーマカラーを「オレンジ」に決め、それに合う色を決めていった。その中からネイビー、イエロー、ホワイト、ミントグリーンという色を決めたがなかなか各色の彩度を決めるのに時間がかかった。

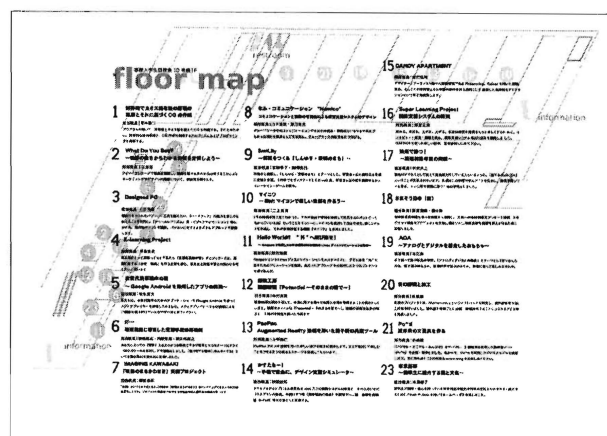
2 パンフレット・フロアマップの作成

制作：高野 葉子

＜表面＞



＜裏面＞



発表会当日に配るためのパンフレットである。各プロジェクトの発表場所と簡単な概要や紹介が記載されている。その他にもトイレ、休憩所といったアイコンや、Good Exhibition 賞の投票用のQRコードを記載した。

2008年度はA4両面刷りで、3つ折というデザインを採用した。またフロアマップとしてパンフレットの裏面の内容を簡素化し、A1拡大したものに現在地を示し2箇所あるパンフレット置き場に配置した。

3 足元案内デザインの作成

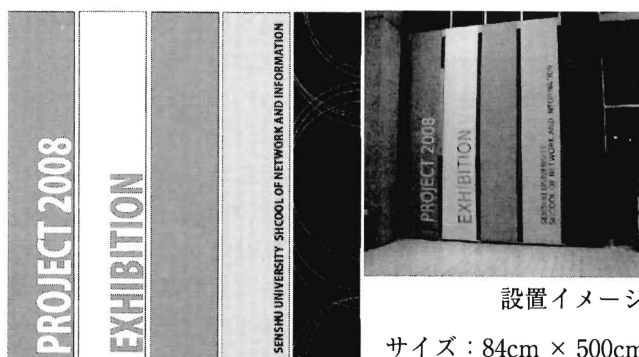
制作：高野 葉子



ラミネーターの最大サイズはA3だが、A3サイズでは足元誘導は目立たない。そのため、今回はA3サイズを4枚組み合わせた形にした。足元誘導は思っていたものと実際に貼るのではイメージに差が出やすい。今回のサイズでも多少小さく見えたのでサイズに関しては十分な検討が必要である。

4 垂れ幕の作成

制作：高野 葉子



設置イメージ

サイズ：84cm × 500cm

2007年度から作成されている垂れ幕。この裏に「プロジェ

クト発表会」と書かれた横断幕がある。設置してみるととても大きく発表会を盛り上げることができた。

また、発表会后にこの垂れ幕を背景に写真を撮る学生も見られたので、プロジェクト発表会を象徴するものとなっていたと思う。

5 Web サイトの作成

制作：高橋 香菜衣



Web サイトは毎年4年生が作成したようだが、2008年度の実行委員会の4年生にはにはCDコースで学んだ学生がおらず、クオリティを考え、2年生に制作を依頼した。

Web サイトにはプロジェクトの概要や発表する各プロジェクトのWeb サイトへのリンクがされてある他、専修大学10号館（発表会会場）へのアクセス方法等も記載されている。

6 Good Exhibition 賞用 FLASH の作成

制作：高橋 香菜衣



発表会の閉会式で Good Exhibition 賞の発表に使用したFLASH。投票結果が出てから編集する必要があるため、凝った演出は採用せず、他のデザインと統一感を持たせた背景で作成した。

7 会場デザインの作成に当たって

オレンジという色を活かす色や形、発表者である3年生に似合うデザインはどういうようなものかということを考

えて、いくつもデザインを考えていた。「制作者が女性なのだから、女性らしさを活かしたデザインも取り入れたらどうか」というアドバイスを上平先生からいただいた。そのアドバイスにより、発表する3年生のイメージ+実行委員会のイメージも入れるというようなデザインを考え、その結果、いくつもの白い曲線が交わるデザインがポスターのデザインとなった。この白い曲線は、各プロジェクトや関わっている人たちの意思をイメージした。また、この曲線を会場デザインなどにも取り入れ、統一したデザインを目指した。

5. 発表会当日について

2008年度のプロジェクト発表会は12月13日の土曜日に行われた。発表会は10:30から16:00の間で行われることになっていたが、8:30にもなると続々と学生が登校し、前日に終わらなかった設営の続きを始めていた。

9:30から全体で開会式を行った後、発表時間になると、少しずつではあるが来場者も増え、それに伴って各プロジェクトさまざまな趣向を凝らした呼び込みや発表を行っていた。

来場者の多くは本学部の1,2年生であったが、中には本学部の4年生や子供連れの方、また企業からお越しの方や来年本学部に入学予定の高校生の姿も見られた。

特に高校生については、自分たちも数年後に経験する内容ということもあり、グループごと複数のプロジェクトの発表場所を訪れていた。

発表終了時間の16:30になっても来場者の方が少し残っていたため、各プロジェクト発表時間を延長し、成果物の説明や発表を行っていた。

17:30からは10103教室にて閉会式が行われ、その中で Good Exhibition 賞の表彰式を行い、閉会式の終了と共に2008年度のプロジェクト発表会が終了した。



各プロジェクトの様子



実行委員会の様子

6. Good Exhibition 賞

6.1. Good Exhibition 賞とは

例年、プロジェクト発表会に会場していただいた方にアンケートをお願いし、その集計結果から好評であったプロジェクトを決定するベストプロジェクトが行われていた。本年度はそれに代わるものとして、Good Exhibition 賞として発表会閉会式にて総合評価ベスト3位を実行委員会が表彰し、項目別5位を後日 Web で公開した。

6.2. Good Exhibition 賞の決定方法

昨年までのベストプロジェクトまでは、デザインをテーマとしたプロジェクトが受賞することが多かった。もちろん、受賞したプロジェクトは素晴らしい成果を挙げているが、一方で企画やプログラミングといった、視覚的ではない部分について評価されにくいという実態があると言われていた。そのため本年度は、「各コースの強みを評価する項目」と「発表会としてプレゼンテーション能力を評価する項目」の下記4点を質問項目として用意した。

- ・企画・構想が良かったプロジェクト
- ・実装力・技術力が良かったプロジェクト
- ・成果物のデザイン力が良かったプロジェクト
- ・プレゼンテーションが優れていたプロジェクト

これら各項目につき、上記3項目は最大3プロジェクト、残り1項目は1プロジェクトのみを選択してもらい、その選択されたプロジェクトの総数により Good Exhibition 賞を決定した。

投票の実施については紙による投票と携帯電話を使用した Web による投票の2方法により実施した。特に外部からお越しの方は携帯電話を使用した投票に抵抗があると考えられたため、主に前者を外部用、後者を学生用として用意した。紙による投票は受付にて投票用紙を配布し、記入したものを受付にて回収するものである。Web による投票は発表会のパンフレットに OQ コードを記載しそこからアクセスして行ってもらえるものである。

6.3. 受賞プロジェクト (総合部門)

- 1位 SmiLily 笑顔をつくる「しんゆり・芸術のまち」
吉田・飯塚プロジェクト
- 2位 Super Learning Project 授業支援システムの開発
栗芝プロジェクト
- 3位 Po^ti 近未来の文房具を作る
小林プロジェクト



閉会式で挨拶するプロジェクトの代表者たち

7. 2008 年度に起きた課題

7.1. 発表場所の決定に関わること

1 各プロジェクトの発表場所の決定

「3.1 2 発表会場及び各プロジェクト発表場所の決定」で記述したように、開放的な空間を確保できるなどの理由により 2008 年度のプロジェクト発表会は 10 号館のアカデミー・モールとゼミ室を使用して行うことを決定した。

2007 年度に比べプロジェクトの数が多いことやゼミ 101H 教室を使用しないことを事前に決定していたため、2008 年度は物理的にアカデミー・モールで発表するプロジェクトが増えることになった。またアカデミー・モールに一般スペースと広いスペースの2種類のブースを確保する予定であったため、全プロジェクトが発表できるようブース配置を設計するにあたり工夫が必要だった。そうして決まったブース配置に各プロジェクトの発表場所を割り当て、そのブース配置の状態で教務課に電源設営を依頼したところ、決まったブース配置では電源を確保できないプロジェクトがあることがわかった。そのため、教務課と調整しブース配置の設計をやり直す必要があり、発表場所の決定後に関わらず発表場所を変更してもらったプロジェクトが出てしまった。今回はそのプロジェクトが変更により了承してくれたことで、大きな問題とはならなかったが、混乱を引き起こすことになってしまった。

この原因は実行委員会がブース配置の設計時に電源に関する調査が不十分であったことであつたが、こうした電源に関する課題は 2008 年度にアカデミー・モールで発表す

るプロジェクトが多くなったことによって発生したものであった。しかし、今後もプロジェクトの数が増える可能性があり、同様の課題が起こる可能性がある。その場合にはブース配置の設計の時点でどこから電源を確保するのか、またその配線をどうするのかについても考えてブース配置設計を行い、教務課と調整しながら進めていくことが必要となる。

2 ゼミ室で発表するプロジェクトの決定方法

「3.1 2 発表会場及び各プロジェクト発表場所の決定」記述したように 2008 年度はゼミ室で発表するプロジェクトの数が、用意していたゼミ室の数を上回り、話し合いによってゼミ室で発表するプロジェクトを決定することになった。具体的には、実行委員が指定した日時、場所にゼミ室での発表を希望しているプロジェクトの代表者（または代理人）とメンバー 1 名に集合してもらい、各プロジェクト同士でゼミ室の使用について協議してもらうことにした。

ここでは詳細な話し合いの内容は省略するが、代表者同士がお互いのプロジェクトの成果物を知らない状態で話し合いをさせると、自分本位の主張になってしまい、話し合いが進まないことが考えられた。そのため、その改善案として、2008 年度は各プロジェクトに、考えている発表の形式や成果について A4、1-2 枚程度のレジュメを希望プロジェクト + 2 部（実行委員会、教務課用）用意させ、その資料を基に話し合ってもらうことにした。また、話し合いのスタンスとしては「相手のプロジェクトを否定せず、このプロジェクトには使用を許可するか」という観点で話し合いを行ってもらった指示した。またゼミ 101H 教室については他のゼミ室から離れた場所にあり、来場者が気づかない可能性があったため 2008 年度は使用せず、実行委員会の控え室とした。101H 教室の扱いについては 2007 年度の実行委員会も使用しないことを推奨している。

ゼミ室で発表するプロジェクトの決定方法には、「話し合いによる決定」「実行委員会の判断による決定」「抽選による決定」の 3 つがある。

1 つ目の方法では、実行委員会の役割は話し合いの場を提供することにあり、どのプロジェクトにゼミ室で発表させるかなどの決定は各プロジェクト同士の話し合いにより決定される。なお、2007 年度、2008 年度実行委員会はこの方法を採用した。

2 つ目の方法は、ゼミ室での発表を希望しているプロジェクトにプレゼンテーションを行ってもらい、実行委員会がゼミ室の使用について判断するものである。しかし、その際、ゼミ室を使用できなかったプロジェクトは発表形式の変更を余儀なくされるため、実行委員会が決定することにはかなりの責任が伴う。このことから、2 つ目の方法を用いる場合審査基準を明確にしておく必要があると共に、開催時期についても慎重に検討しておく必要がある。

3 つ目の方法はもっとも簡単な方法ではあるが、広いス

ペースとしてではなく、囲まれた空間としてゼミ室を必要としているプロジェクトが使用できなくなる可能性があり、納得した決定とならない可能性が高い。

こうしたゼミ室で発表するプロジェクトに関する課題は 10 号館で発表を行っていく以上毎年起こると考えられる。そのときゼミ室で発表するプロジェクトの決定方法のどれを採用するかは、その年の実行委員会の判断であるが、その際の基準として発表者のことを第一に考え、検討してほしいと思う。

3 大教室の利用方法

プロジェクト発表会を 10 号館で行うことで新しい発表の形式が可能となった。それはアカデミー・モールに隣接した大教室を利用した発表である。アカデミー・モールに隣接した大教室は 10101 教室、10102 教室、10103 教室があり、これら教室も事前に教務課に依頼しておくことで発表会に使用することができる。2008 年度の実行委員会はこれら大教室を発表している 3 年生の控え室や、閉会式の会場に使用する予定でいたが、あるプロジェクトから発表に使用したいとの要望を受けた。そのため、教務課や、先生方で組織される委員会に相談し調整した上で、ゼミ室での発表を希望したプロジェクト（広いスペースを希望していたため）の賛同を得て 10101 教室を発表のために使用することを許可した。他の 2 教室については 10 号館 1 階の備品置き場と発表者の控え室に使用した。

発表会が 10 号館で行われることで、アカデミー・モールだけでなく大教室での発表も可能となった。しかし、やはり発表者の控え室や荷物置き場を最低でも 1 つは確保したほうがいい。発表者の荷物が発表場所に置いてあると、来場者から見てあまりいいものではない。2 階に控え室を確保しておくことも可能だが、発表会には多くの人が出入りするの、1 階の目の届く範囲に確保することが望ましいと考える。

他の教室については発表に使用することは可能だが、希望するプロジェクトが多くなれば、ゼミ室のように話し合いの必要が出てくる可能性がある。そうなれば管理が複雑になる可能性はあるが、大教室については、さまざまな利用方法が考えられ、今後の検討事項として挙げられる。

7. 2. 各プロジェクトとの連絡に関わること

1 連絡体制

2008 年度の実行委員会も 2007 年度同様にサイボウズのメール機能と掲示板を併用した連絡体制にて連絡を行った。しかし、この方法は、各プロジェクトの代表者と連絡先希望者の連絡先を実行委員会がまとめる作業が発生すると共に、送信においても個人情報観点から大学以外のメールアドレスを申請した学生には個別にメールを送ったことによる手間が発生した。

さらには、メールをアクティブメールで見ている学生にとってはサイボウズの掲示板の確認による手間も発生し、情報源がさまざまにわかりにくいとの意見もあった。

これらの改善案の例として、グループ等を使用し、実行委員会からの連絡や情報管理を一元化することが考えられる。現状ではアンケート機能等を備えたものもあり、それらを使用することで、発表会に関する要望を受けるための申請書の配布やデータの転記がなくなり、実行委員会の労力を軽減することが出来ると考えられる。

他にも申請書について Web アンケートのシステムを構築し、期限内に回答してもらうなども考えられる。その際には期限遅れのプロジェクトの扱いについて考慮しておく必要があるものの、システムの構築を2年生のメンバーに実行してもらうなども考えられ、そうした活動により、実行委員会のメンバー編成の幅も広がると考えられる。

2 連絡の徹底

2008 年度の実行委員会は発表会の実施にあたって「プロジェクト発表会マニュアル」を作成し、事前に各プロジェクトの代表者と連絡先希望者にはメールに添付する形で配布し、他のメンバーも確認できるようにサイボウズの掲示板にアップロードしておいた。さらにマニュアルの記載内容を説明する説明会を11月下旬に各プロジェクト代表者と会場委員に向けて行い、発表会前日にも代表者に向けた打ち合わせを行った。またその中で他のメンバーにも説明会の内容を伝えるように指示し最大限ルールやマナーの徹底に努めた。

しかし、実行委員会の説明会開催に関する連絡が不十分であったためか、説明会や打ち合わせに参加しないプロジェクトの代表者もあり、そうしたプロジェクトには個別に連絡を行っていた。

発表会では各プロジェクトの発表に使用したイスや机は10号館1階のゼミ室内にあるものを使用していた。そのため、アカデミー・モールで発表したプロジェクトは発表会の会場撤去時にそれらを元のゼミ室に戻すことになる。その際、実行委員会が作成したマニュアルには返却時間を記載し、その時間まで返却しないように連絡していた。イスや机の返却時間を決めていたのは、ゼミ室で発表を行ったプロジェクトが、返却されるイスや机をゼミ室内に入れるだけのスペースを整理する時間を設けたためであり、混乱や備品の紛失を避けるためであった。しかし、一部のプロジェクトがその返却時間を守らず、返却に来てゼミ室の前にイスや机を放置する事態が起ってしまった。

そうしたプロジェクトを注意してみると配布したマニュアルを読んでいないことがわかった。今回はゼミ室で発表したプロジェクトや注意したプロジェクトの協力のおかげで、備品が紛失するということにはなかった。しかし、発表会におけるルールやマナーの徹底は実行委員会の役割の1つであり、実行委員会が各プロジェクトの学生たちにマ

ニユアルの読み込みを行っておくことを指示せず、また連絡が行き届いているかの確認を行わなかったことにも責任がある。そのため、説明会に全プロジェクトが参加しその内容をメンバーに伝えるよう、連絡を徹底すると共に、その連絡の手段については、今後も検討していく必要があると考えられる。

8. 実行委員としての活動を終えて

8.1. 「かけがえのない時間で得たもの」

プロジェクト発表会実行委員会 2年次 高野 葉子

2年生の後期という時間をより貴重なものにできたのは、この発表会実行委員をやらなくては手に入れることができなかった、かけがえのないものだったと思う。私がこの委員会の存在を知ったのは上平先生の授業と友人からの声かけである。サークルなどにも所属していなかった私は、日頃の生活に受動的なものを感じていたので、なにか変わるきっかけになるのではないかと考え、この委員会に参加し役職をいただいた。

この委員会に参加したメンバーの2年生はCDコース2人とISコース1人という、去年に比べては明らかに少ない人数構成であった。委員会全体では、CDコースが声をかけてくれた友人と私2人だけで発表会デザインのすべてをやらなくてはいけないということもあり、大きな不安を抱えた。しかし後々考えると、私たち2人仕事を任せてくださった4年生の先輩方の方が計り知れない不安を抱えていらっしやったのではないと思う。

私は学内で先輩と関わることがいままですほとんどなかったため、4年生の先輩方と交流を持つということ事態、初めての経験であった。しかし、4年生の先輩方とはとても話しやすく、意見しやすい雰囲気を作ってくださり、その緊張や不安は全てと言ってもいいほどなくなった。こうして築き上げてくださった信頼関係がのちのちの制作物に大きく影響したのではないと思う。それはどういうことかという、モノを作る上での「誰のために？」というところで、「日頃からお世話になっている先輩方のために」という気持ちが一層強くなる要因であったからである。

こうして、私たち2人は制作物の全体のデザインを決めるためにたびたび話し合いを行った。幸い、もう1人のメンバーである声掛けしてくれた友人とは家も近く話し合いをするのには、とてもいい条件も揃っていた。友人は中間発表会を手がけていたということもあり、たくさんのアドバイスをしてくれたり、いい話し合いを積み重ねることができたと思う。

活動を進めて行く上で、私たちが抱えた最大の問題は役割分担であった。2人という人数は良くも悪くも持ちつ持たれつになってしまうのである。どちらも平等に仕事の分量を分けるということに難しさを感じた。お互いCD総合

演習授業の方でもたくさんの作業を抱えていたり、アルバイトも行っていたが、発表会までの時間も限られていたため、本当に時間と根気との戦いであった。

お互い分担を決めずに2人で同じ仕事をしていて作業がなかなか進行しなかったため、2人で話し合い役割分担を大きく決めることになった。私はポスターや垂れ幕などの紙媒体に関わるデザインを、友人はweb ページなどのweb 媒体に関わるデザインという大きく役割分担することにした。このことで作業の進行はしやすくなったし、それぞれの仕事に責任を持つきっかけになったと思う。

4年生の先輩方や、発表会に協力してくださっている先生方や教務課の方、企業の方の協力が目に見えてくると、不思議なことに段々身近に感じ、より一層妥協はしたくないという思いが強くなったが、発表会の時間も刻々と迫ってきていた。

私が担当した役割である紙媒体に関わるデザインには、発表会のときに目に触れる垂れ幕や、足下デザイン、ポスター、フロアマップなどのことである。これらを統一したデザインにしたいということになると同じ人間が作らなければ、どうしてもバラバラに感じてしまうものがあると感じていた。そのため、多少の負担は致し方ないものであると思い制作を続け、朝早くから夜遅くまで学校で作業をする日が続いた。

これらのデザインを決めるためには、まず発表者である3年生のイメージからデザインにも大きく関わってくるであろうテーマカラーを決めようということになった。意欲的に活動している3年生を目にしていたため「活発」というキーワードが浮かんだ私たちはテーマカラーを「オレンジ」に決め、それに合う色を決めていった。また、上平先生にも度々アドバイスを頂き、「発表をする先輩方のイメージ」と「発表会をお手伝いをしている自分たちのイメージ」も入れるというようなデザインに変えていった。

このように試行錯誤をしている時にも、4年生の先輩方は、自分のことのように考えてアドバイスをくださったたり一歩引いたところから私たちの制作を見守ってくださった。時には、切り貼りやなどの面倒くさい作業も引き受けてくださったりと、本当に暖かい気持ちで接してくださった。これは、準備中も発表会が終わった今も変わらない。学校でお会いしたときなどには「このつながりを大切にしたい」という思いも伝えてくださって、私はかけがえのないものを手にすることができたんだと改めて実感した。

また、技術的なことで成長することはもちろんたくさんあったが、それよりも人間的なことで4年生の先輩方の姿勢から教えて頂くことがたくさんあった。もし、この発表会に携わっていなければどちらも手に入れることができないかけがえのないものであった。

今後、発表者側となっていくための友人との信頼関係を築くことができたことを嬉しく思う。そして、私が4年生になったとき、4年生の先輩方が私にしてくださったこと

と同じことをわたしも後輩にできるような人間になっていきたいと思う。

このような貴重な経験ができたことを嬉しく思うと共に貴重な経験をさせてくださった方々に感謝したい。

8. 2. 「大学生活最後の仕事から学んだこと」

プロジェクト発表会実行委員会 4年次 岡和田 拓也

1 活動全体について

2008 年度のプロジェクト発表会実行委員会の代表は2007 年度の実行委員代表からの推薦と私自身実行委員会をやりたいと希望していたこともあり、正式に依頼され決定した。この時点では、去年の実行委員会が残してくださったマニュアルもあり、それほど実行委員会の仕事は負担にはならないと考えていた。しかし、実際には想像以上に、考え行動する力が求められた仕事であり、実行委員会が活動しなければ発表会が成り立たないという重大な責任が存在する仕事であった。

2 実行委員会を通して気付いたつながり

筆者自身去年発表者としてプロジェクト発表会に参加し、その中で、実行委員会と関わっていたが、そのときは実行委員会の存在を希薄に感じていた。しかし、4年生になり実行委員会の代表を務めたことで2年生を含む実行委員会の全メンバーや教務課、先生方、そして発表者である3年生など、本当に多くの人と接することになり、そういったつながりの中で、自分たちの活動は多くの人に支えられていることや、自分たちの活動が誰かを支えていることに気付いた。

具体的には、実行委員会が活動するにあたって、大学施設の手配や、発表場所の決定などの大きな決断が必要となることがある。そういった際、教務課の方々には窓口時間外にも関わらず対応いただき、また「必要なものがあったら何でも言ってほしい」との言葉を頂いたことで、大きな支えとなり、自信を持って活動することができた。さらに実行委員会内でも、4年生は成果物の制作や会場デザインに関わる相談で2年生に支えられ、また2年生も4年生に支えられる部分もあったと思う。

また、実行委員会の活動が支えている人たちとして、発表者である3年生があげられるが、あるとき先生に「実行委員会がいなくては、発表会は成り立たない」との言葉を頂いたとき、実行委員会は3年生だけではなく、先生方や発表会に関わる多くの人を支えていることを自覚した。

こうしたつながりを通して気付く多くのことは、実行委員会を経験しなければ、恐らく気付くことはなかったと思う。そのため、実行委員会と関わりの少ない学生にとっては、こうしたつながりに気付くことは難しいのかもしれない。私自身も去年、プロジェクトリーダーという立場だったため、実行委員会と接する機会は少なくなかったが、そ

れでも、自分たちの発表会が多くの人々のつながりによって支えられているということを感じることは少なかったように思える。そのため、リーダー以外の実行委員会と直接かわりを持たない3年生たちのほとんどは、おそらく実行委員会の活動を知る機会がなく、その裏で支えてくださっている教務課の存在も感じる機会がないと考えられる。

実行委員会や教務課は「感謝してほしい」と望んでいるわけではないし、そういった気持ちで行うことはよくない。しかし、3年生たちが、発表会が実行委員会だけでなく、教務課の方々そして先生方によって支えられていることを感じ、そのことに感謝の気持ちを持つことで、より発表会を盛り上げることができると思う。そのため、発表を行う3年生たちには、発表会に関わる人たちはつながっており、多くの人に支えられながら成り立っていることを意識して発表を行ってほしいと思う。

3 実行委員会の活動について

今年の実行委員会はとてもチームワークがよかったと思う。仕事の内容や量に比べて圧倒的に人数が少ない状態で活動を行っていたが、各自が必要な役割だけをこなすのではなく、他のメンバーを支えようと主体的に活動していたことで、必然的に話し合いを行う機会も増えいった。そうして話し合いの機会が増えていくにつれ、チームワークもよくなり、さらには、実行委員会としての話し合いではなく、休憩時間には個人的な話なども交わされるようになっていった。

2007年度の実行委員会は基本的に4年生が2年生に指示を出し成果物などの管理を行っていたようであったが、2008年度は4年生、2年生が相談しながら進めていくことを決めていた。そのため、役割や詳細なスケジュールについては2年生に任せ、必要があれば4年生に相談する形をとっていた。その結果、2年生も自分たちが総合演習の課題などで忙しいにもかかわらず、空いた時間を見つけ実行委員会の仕事を行ってくれていたため、とても頼もしい存在だった。

実行委員会が4年生と2年生によって組織されることは、とても新鮮で面白い活動であると思う。それは、2年生は数年後の自分たちの姿をイメージすることができると共に、3年生で履修するプロジェクトを身近で感じることで、4年生は2年生を含むマネジメントを行うことを意識する必要があるなど、勉強になることが多いためである。私は去年プロジェクトにてリーダーを務めた経験があったため、実行委員会での2年生も含めた活動の進行に関することでは、去年の経験を少しは活かすことができたと思う。しかし、3年生への実行委員会の決定や要望受けや、教務課との調整など初めての経験することも多く、戸惑いもあった。そのため、試行錯誤を繰り返して行い、反省すべき点もあった。しかし、そういったことも含め、実行委員会を務めることで、去年のプロジェクトと共に多くのこと

を経験し、学ぶことができたことは、本当に良かったと思う。

4 変化の中で感じたこと

今年は、名称やプロジェクトの中での発表会のあり方など、色々と見直された発表会であった。そうした中で、実行委員会にも判断や進捗に影響が出る場合も少なからずあった。しかし、こうした事態にも関わらず、発表会を行うことができたのは、一緒に活動してくれたメンバーが積極的に実行委員会を務めてくれたこと、そして、何より自分自身が実行委員会の活動を楽しんで行えたことが重要だったと思う。

プロジェクト発表会実行委員会を引き受けたときは、自分でできるかという不安もあった。さらに、メンバー集めにもかなりの時間を要してしまい、焦りも大きかった。しかし、集まったメンバーと発表会の成功という目標に向かって活動する時間はとても楽しく、去年私自身が経験したプロジェクトを思い出す時間でもあった。もちろん、活動において反省すべき点は多かった。しかし、そんな時メンバーがフォローしてくれたお陰で、乗り越えることができた。そうして、2008年度のプロジェクト発表会を終えたとき、「実行委員会を引き受けて良かった」と心から思うことができた。

こうした、変化の中で実行委員会の代表として楽しみながら活動し、無事に発表会を終えることができたことは、私の大学生活最後の思い出となるとともに、人生の中でも大きな自信となる経験だったと思う。

最後に、今回こうした思い出深い経験の機会を与えてくださった教務課や先生方には本当に心から感謝している。また、私たちの経験を報告書として残すことで、今後の実行委員会にとって有益な情報となり、変化しながら毎年盛大な発表会が行われることを祈っている。

謝辞

プロジェクト発表会実行委員会を進めるにあたり、教務課の皆様には実行委員会の活動を強力にサポートしていただきましたことを深く感謝いたします。

また、実行委員会の要望や相談を快く受けくださった先生方、実行委員の仕事に快く引き受け共に活動してくれた全メンバー及び、設営・復旧の際に協力いただいた友人方にこの場を借りまして、厚く御礼申し上げます。

参考資料

- [1] 横山 敬之, 高橋 和美, 上平 崇仁, 『2007年度プロジェクト発表会実行委員会の活動報告』, 専修大学 ネットワーク情報学会 (専修ネットワーク & インフォメーション), No14, 2009, pp33-41